

日本のフリーターに対する若者の態度の変化  
Japanese Freeters: The Changing Attitudes of Youth

Caitlin Marotte      マロツテ・ケイトリン

In this paper, I look at the various Japanese viewpoints and opinions concerning "Freeters;" atypical workers in Japanese society. My research consists mostly of firsthand accounts and opinions, gathered through interviews, blogs, and surveys, all from the perspective of both freeters and non-freeters. I also consider to what extent the "Westernization" of Japan has influenced this phenomenon and the overall implications of the changing views of Japanese youth.

Over the past thirty years, Japan has seen both ends of the economic scale. In the mid 1980s, Japan enjoyed a spectacular economic era known as the Bubble Economy (バブル景気), which, until its collapse, starting in the 1990s, provided as-of-yet unheard-of opportunities for Japanese workers. One no longer needed a full-time company job to support themselves, or indeed, their family. As such, many chose to follow a different path; the path of a "Freeter" (フリーター).

The word フリーター comes from a combination of the two words "Free Arubaita," an arubaita being someone who works a part-time job. Thus the word フリーター essentially translates to "part-time worker." But more than just the literal meaning of the word, the label of freeter has a much deeper meaning to the Japanese people. A freeter is a person who, either through personal choice or by the influence of an outside circumstance, has not "correctly" assimilated into Japanese society. That is to say, they do not work full-time jobs at one company for their entire life, as is the norm in Japan.

It is important to note that there are generally considered to be two separate types of freeters in Japan: Those who have chosen to live as part-timers, and those who have been given little or no choice in the matter. An abundance of both internal and external factors influence both cases. Those who have little choice have often failed to meet requirements in some other part of their life. For instance, failing college entrance exams, failing to secure a job at a company (despite wanting one and making an effort to get one), or even having been fired from a previous job may all lead to having to settle for a position as a freeter.

The reasons that one might choose to become a freeter are just as, if not more so, varied. Not wanting to commit to one company for a lifetime, wanting to put effort into developing a talent such as music or art, and generally wanting more time for oneself are all commonly stated reasons that the freeter lifestyle appeals to Japanese people. However, this all comes at a high

cost. The position of freeters is often looked down upon by outsiders as being selfish or as the person not having made enough effort concerning their future.

Concerning freeters, there has already been much research invested in determining the socioeconomic factors that have influenced both the beginning and continuation of this trend, and it all remains fairly consistent; insufficient guidance while in high school, poor economy leading to insecure jobs, and the job market becoming more competitive as a result of increasing unemployment. Therefore, to do more research on this topic would most likely not yield any new or unique information.

Therefore, I will instead be focusing my research on the Japanese opinion of freeters, and more specifically, opinions concerning those who pursue the freeter lifestyle by personal choice rather than necessity. The opinion of part-timers of course varies from person to person, but obviously there is a general view carried by the Japanese people. And with the changing values of the Japanese youth, so too are the views of those who choose non-traditional career paths.

伝統的に、日本人のフリーターについての意見は別にやさしくないはずだ。もし、だれかフリーターなら、多くの方は「フリーターをやっている人は怠け者なので、挑戦的な仕事をしたくない」という態度を持っているだろう。現実には、たいてい社員募集や入試などに失敗して、フリーターになる人が多い。特に近年来日本で、就職活動はとて大変なので、フリーターになる人はだんだん増えてきた(Hori)。

そして、NEETという人も増えてきた。NEETは「Not in Education, Employment nor Training」という意味の言葉だ。フリーターとNEETは似ているけれども、根本的（こんぽんてき）に違う。フリーターは大学や主婦などではなくて、アルバイトで働いているか働きたい人だ。NEETも学生や主婦などではないが、仕事もなくて、仕事を探していないし人だ。たいてい、フリーターは何かの常勤の仕事したくないわけではないが、何らかの理由で、機会がない Honda 。だが、自主的にフリーターの生活を選んだ人も多くなってきた。

関係がある経済的な変化は女性就業問題だ。日本で、他の国と同じように、伝統的に、女性が稼ぎ手ではない。日本の就業で、次の考え方がある。

"It was assumed that men would work until retirement, whereas it was assumed that women would work for some years in either clerical or manual jobs and then leave employment for marriage and children. The typical pattern for these women was reentry into the labour market some years later, taking jobs as low-wage part-time workers. The fact that most women reentered the labour market as part timers was due, first of all, to the division of labour in the home, where women were responsible for most of the housework and child rearing. Moreover, in a society which had developed strong 'internal labour markets,' there was only a very limited market for those who wished to gain permanent employment later on" (Genji,16).

社会科学の東京大学研究所が2004年にした研究によると、アンケートをした女子学生過半数（かはんすう）が「高校生の後で、勉強を続けたい」と言っていた。それに、ほぼ三分の一は「結婚や出産の後で、仕事を続けたい」と考える。(Genji).

この態度の変化がどちらのタイプに影響された。どの国でも、労働力は制限（せいげん）がある。労働力になりたがる人が増えても、仕事の数がこのような経済で増えないだろう。仕事を見つける競争がはげしくなると、失敗する人も増える。だから、フリーターになることは不可避になってきたのではないかと思う。しかし、日本人の伝統的な態度はそんなにはやく変わらない。

それとは対照的に、アメリカでもフリーターと似ている動向があった。90代に、「X時代」という若者がいた。その人たちはフリーターのように会社に入らないで、自由でアルバイトをしたり、遊んだりした。私は日本にいる時、「文化に対して、今日の東京は90代に似ているのではないのでしょうか」と考えた。だから、アメリカで、この「フリーター増えた」ことがあるので、アメリカの意見は別に厳しくないと思う。

ある記事で、20代の日本人の女の人が自己発見のために、ニューヨークへ引越して、フリーターのような仕事をした。記事の筆者はフリーターの状況で、次のように書いた：

"As a Japanese version of slackers, such young people are often derided at home as selfish for drifting through part-time jobs or trying to develop talents in the arts — photography, music, painting, dance — rather than contributing to society by joining a corporation or marrying and having babies. The pressure can be intense" (Prasso).

都市のように、ニューヨークと東京は別に違わないだろう。しかし、価値観（かちかん）は大きく違っているようだ。どこの国でも、家族は若者に大きいな期待を持っているのは普通だが、日本で、特に若者に適合（てきごう）をちゃんとする期待もあるはずだ。その圧力（あつりょく）は日本社会では一般的な現象だろう。

次の引用が示したように、この作者は家族からのプレッシャーを強く表して、自分が異なってる異見を持っているため、たくさん欲求不満（よっきゅふまん）を感じているそうだ。

“My parents are so conservative, they can't believe I'm here alone. They want me to be married to a Japanese man, an established man, make some kids and live in the same house with them. I can't even believe I am from that family. I am so different!” (Prasso).

今の若者の価値観がだんだん親が理解できない程変わっているようだ。前述したように、フリーターが伝統的価値観を守れないと大勢の人は心配している。例えば、フリーターの仕事をしている兄弟について、28歳の女性はブログでこう書いた。「兄のイメージが崩れていくのを見たくないだけなのかもしれません。兄は、家族の期待を一心に請け負っていて、つぶれてしまったかもしれません。それでも、兄が、自分よりも先輩であり、色々教えてもらった家族です。」(umetwins)。お兄さんの今の状況について、複雑な感情があるようだ。フリーターには軽蔑（けいべつ）の態度を持っているが、お兄さんを愛しているはずだ。

コメントで、同じくフリーターの兄弟を心配している他の女性も意見を書いた。「自信を失ってしまったからです。」、また、「将来、親が無くなった後が不安です。」などのような感情を表明した。

この例で、フリーターについての意見は常に二分法になっているのではないだろう。しかし、他のフォーラムはそんなにやさしくない。

ある会社で、33歳の男は長い時間でフリーターで働いた。フォーラムで「もし新社員が入ったら、どんな話し方を使ったほうがいい」という質問をあげた（教えて！ウォッチャ）。

この記事で、皆の返事はちがった。他の社員は「フリーターなので、新社員に敬語を使わなければならない。」という意見を持っているが、あのフリーターの意見は「私は新社員の先輩だし、もっと年上だし、それに敬語を使うのは屈辱的だ」ということであった。それに対して、回答者は色々な意見を持っている。

ユーザーyahoouoooo112さんは「その程度で人生経験だとか社会人経験だとか言われても、所詮バイトなんだし、『ダメすか』と書いている時点で、所詮バイトだなあと思いますよ。自分の地位を上げてから言いな」と書いた。

多分、一番鋭い回答はユーザーgunooさんからであった。

「理不尽でしょうが、あなたは所詮バイトです。相手は正社員ですからね」

一方、ユーザーtakeoromenさんは、「自分が年上のバイトの立場であれば、仕事中は敬語を使ったとしても、休憩中や終業後にはタメ口で話すだろう」と言っていた。takeoromenさん以外に、回答者全員はフリーターについての意見は別に同情的ではなかった。

このQ&Aを読むと、「社会で、フリーターの社会での地位はまだ高くないだろう」という結論を下せるが、実際にフリーターについての日本社会での意見はそれより複雑だろう。

しかし、フリーターの仕事をしている人はいつも自己憐憫をするわけではない。

日本で会ったジュンさんは同じような体験があった。高校に卒業した後で、ホストの仕事をした。それをやめた後で、バンドをしながら、コンビニで働くのを始めた。ジュンさんの話を要約すると、「フリーターって、利己的だ。フリーターなら、家計の安定性がないだろう。そして、最近未婚の人は増えて、出生率は減っていく。フリーターは家計の安定性がないので、あの問題を解決するのを助けられないという態度を持っている人が多い。あのような意見がわからないわけではないが、私は他の日本人に比べて、もっと構造的だかもしれない。日々はちょっと大変だが、後悔（こうかい）しない。夢を追うのは大事だと思う。」

” Trends in Japan ” というウェブサイトのオンライン調査によると、調査対象者のうち、四十二パーセントのフリーターは「フリーターの生活に慣れたので、フリーターだ」のような返事を書いた。そして、三十六パーセントは「うれしかったら、大丈夫だ」と答えた。二十二パーセントしか「フリーターだけど、嬉しくない」と答えなかった(Trends in Japan)。

調査対象者の常勤社員でもフリーターに対してだいたい寛容的な態度であった。四十八パーセントが「フリーターになる理由が理解できる」と答えた。実は、二十八パーセントだけ「誰でもフリーターになる理由が全然わからない」と答えた。

「どうしてフリーターの生活に嬉しいか？」について、一番多い答えは「自分の時間が多いので」であった。他の答えは「夢は大事だ」や「会社に入っても、安定（あんてい）な生活を必ずしもできるとはかぎらない」であった (Trends in Japan)。

調査といえば、私は、日本に会った知り合いや友達にフリーターについての態度

に関するアンケートを出した。アンケートを返事して、返した皆様は20代の日本人なのに、それぞれやっている仕事は違うか、育てられる環境と経験が違うせいかな、私の調査に対する返事は多様性（たようせい）を見せた。友達なら、考え方はだいたい同じではないでしょうか。だが、書いていた返事は人によって、全然違った。フリーターを非難（ひなん）する人もいるし、フリーターの考え方がわかる人もいるし、それにフリーターの考え方に感心する人もいる。フリーターに対する肯定的な意見は、伝統的な視点から見れば比較的新しい傾向なので、同意する人も同意しないもいるというのはもちろんだが、私の調査結果に見えるように、一般的に言えば、日本人の若者がフリーターに対する態度は別にきびしくなかったと言えるのではないかと思う。

聞いた質問は七つがあった。最初は仕事や年齢も聞いたが、主な質問は「フリーターについて、どう思うか？」のようなものであった。「近年来、日本でフリーターになった人は増えてきました。それはどうしてだと思いますか」と聞いたら、回答者Aは「仕事が自分に合っていないと感じている人が多く、就職しても自分の思っていたこととの違いから、やめてしまう人が多いと思います」と答えた。伝統的に、仕事をやめる日本人が少なかったが、その考え方も変わっているようだ。そして、回答者Cはこの傾向に「ゆとり教育の影響と学力の低下によって就職への意欲が低下しました。また、就職のための雇用の数が年々減っています」と書いた。

一番答えが様々な質問は「フリーターに対して、どんな態度を持っていますか。どうしてですか。」であった。結果は半分は肯定的、半分は否定的と大体分割された。回答者Aは「特に気にしません。自分にこだわりを持っているのだと思いますが、それをいいとも、悪いとも思いません。」と書いた。同じように、回答者Bは「特に何

もないです。ただ、日本の制度として、まだ正社員を重んじる制度あるため、見直しをする必要はあると思います」と答えた。 反対に、回答者Eは「フリーターをしている理由によると思います。仕事をする気があるのに仕事が見つからない人や、自分の夢のためにフリータをしている人に対してはマイナスなイメージはありませんが、自分の意志で（楽だからというような理由で）フリーターを選択しているのであれば、あまり良いイメージは持てません。」と書いた。

回答者Dも悪いイメージを持っていたようだ。「人生を何も考えてないノープレッシャーではないでしょうか！」と答えた。

最後の質問で、「他にフリーターについて、知っていること、考えていることがあれば、自由に書いてください」とした。このところでも、答えは様々であった。回答者Bは「仕事も大事ですが、日々楽しみながら夢をかなえる、追うのはとても大切で、逆に誰もができることではないと思います。」と書いたのに、回答者Dは反対に「フリーター=自分の時間を売って、決められた時給で働くことを心に決めた人達だと思います！バイトは自分の時間を1時間いくらで売りますよって感じでお金にしてるので時間をお金にして稼いでると思います！」という意見を持っていた。最後に、回答者Cは心の葛藤（かっとう）を抱えているようだ。「家族を持つとき、フリーターはよくないと気づくと思いますが、夢があるなら、良いと思います。」

From the results of all that I have gathered from my research and through asking acquaintances for opinions, the results point to what may at first appear to be a dichotomist view of freeters being either a good or bad part of society. Closer examination reveals that the topic depends entirely person-to-person, but the overall trend is a positive attitude towards freeters. Many people may pity the position those who become freeters by necessity find themselves in, but do not necessarily condone becoming a freeter as a choice. Others admire the relaxed, personal lifestyle that freeters are able to lead. Despite these increasing progressive attitudes, there are still many that condemn such a lifestyle, claiming that freeters do nothing to help in the larger-scale problems that Japan is facing as a nation.

A friend of mine once referred to the young people of Japan, himself included, as being the "Hollywood Generation." He told me that Western views and values were becoming ever stronger as time passed, particularly in Tokyo and other internationalized cities. From my research, the shift in values seems evident, although of course dissent still exists. In a place as traditionally rooted as Japan, even small societal changes are relevant, and the view of part-time workers is no exception. As Japan continues to Westernize, perhaps the so-called "Hollywood Generation" will see the end of the traditional outlook on those who choose non-traditional work in Japan.

### Works Cited:

Genji, Keiko. "What Do Female High School Students Think of Their Futures? Educational Aspirations, Life Course Expectations and Gender Role Attitudes and Problems of Youth Support Agencies in Japan." *Social Science Japan*. 2005: 15-19. Print.

Honda, Y. "Freeters": Young Atypical Workers in Japan", *Japan Labor Review*, 2005: 2, 3: 5-25.

Hori, Yukie. "Characteristics and Problems of Youth Support Agencies in Japan." *Social Science Japan*. 2005: 8-10. Print.

Kosugi, Reiko. "Youth Employment in Japan's Economic Recovery: 'Freeters' and 'NEETs'." *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus*. Japan Focus, 11 2006. Web. 12 Oct 2012.

Prasso, Sheridan. "Escape From Japan." *New York Times* 15 Oct 2006.

Trends in Japan. "What do you think of Freeters?" *Web Japan*. 4 Feb 2002.

umetwins, . "兄への態度." N.p., 08 2008. Web. 25 Sept. 2012.

<<http://okwave.jp/profile/u814742.html>>.

教えて！ウォッチャ."33歳フリーター「18歳の新人に敬語じゃないとダメですか？」" 2011 < [http://bizex.goo.ne.jp/column/ip\\_14/72/1264/](http://bizex.goo.ne.jp/column/ip_14/72/1264/)>